

## 凡 例

1 本目録は、『史料目録』第95集として「近現代文書目録(一)」を収めた。本目録の対象は、「鈴木莊六文書」・「手島兵次郎文書」・「山口重次文書」・「赤井春海文書」・「熊田保文書」の5つの文書群から構成される。

2 目録の編成にあたっては文書群の階層構造に留意し、ISAD(G) (国際標準:アーカイブズ記述の一般原則)の考え方を参考にした。ただし、個人文書の場合、組織体文書と異なり、原秩序が崩壊、またはそもそも当初から体系的整理がなされていないケースが多く、それぞれの文書群の現状を踏まえた上での階層構造分析とシリーズ編成が必要になる。基本としては原蔵者の経歴に応じたシリーズレベル(サブ・シリーズレベルも含む)を設定したが、文書群の構造によっては経歴に形態別を加えた混合型、または形態別のみのシリーズ編成を行っている。なお、シリーズ(またはサブ・シリーズ)以下は文書の形態に応じてファイルまたはアイテムレベルを設定した。

3 文書の集合的記述は、フォンドとシリーズのレベルで解題を記した。

4 文書1点ごとの記述は、①表題・作成・宛先(表題、内容摘記、注記、作成または作成→宛先)、②年代(作成年月日、年代幅、西暦年)、③数量・形態・刻字、④整理番号、の順に記載した。

表題は、冊子型文書も書付型文書も原表題もしくは柱書を取り、それが無い場合には〔 〕で表題を付与した。また、原表題や柱書だけでは不十分で内容摘記が必要な場合、および注記事項は、その後に〔 〕で内容および注記事項を摘記した。さらに、複数の文書が一括されている文書の場合、表題に一括文書名を表記し、一点ごとの細目表題を以下に列記した。作成に関しては、表題欄に表記したが、作成者不明な場合で罫紙・用紙の種類から作成者が類推できるものは、「陸軍罫紙」などと補記した。また、破損等で判読不能な箇所は□で補った。

作成年月日に関しては、和暦と西暦を表記し、推定したものは〔 〕を付した。また、年代幅がある場合は、起点から終点までを表記した。

数量・形態・刻字は、綴・冊・枚で表記した。また、合綴または袋などで一括されているものは何種と表記した。その他、刻字は鉛筆を含めペン書きのものは「ペン」、墨書のものは「墨書」、タイプ打ちのものは「タイプ」、謄写版印刷のものは「謄写版」、活版印刷のものは「活版」、蒟蒻印刷のものは「蒟蒻版」、複写印刷のものは「複製」と表記した。

5 本目録が対象とした文書は、廃棄から当館受入後の整理までの過程で原秩序が失われ、整理された際の順序によって史料番号が付与されたため、目録上で史料が整理番号順に並んでいない。そのため番号による検索には不便をきたすので、史料の引用に際しては番号のほか掲載頁もできるならば併記することをお願いしたい。

6 本目録は研究部加藤聖文が担当した。鈴木莊六文書に関しては、2004年度に川島淳(駒澤大学大学院生)が作成した仮データを基に、手塚雄太(國學院大学大学院生)がデータ作成の補助にあたった。手島兵次郎文書に関しては、手塚雄太・近藤秀行(東京大学大学院生)・安原徹也(東京大学大学院生)・橋本陽(学習院大学大学院生)・雫石忠宏(学習院大学大学院生)が、山口重次文書および熊田保文書に関しては、手塚・橋本・雫石が、赤井春海文書に関しては加藤圭木(一橋大学大学院生)がデータ作成の補助にあたった。



---

## 総目次

---

口絵

凡例

総目次

### 近現代文書目録（その1）

#### 鈴木莊六文書目録

目録本文細目次 .....	3
解題 .....	7
目録本文 .....	13

#### 手島兵次郎文書目録

目録本文細目次 .....	51
解題 .....	53
目録本文 .....	57

#### 山口重次文書目録

目録本文細目次 .....	93
解題 .....	95
目録本文 .....	99

#### 赤井春海文書目録

目録本文細目次 .....	119
解題 .....	121
目録本文 .....	123

#### 熊田保文書目録

目録本文細目次 .....	131
解題 .....	133
目録本文 .....	135



# 鈴木莊六文書目錄



鈴木莊六文書目錄 本文細目次

Series No1: 公的活動（軍） .....	13
Sub-Series No.1: 教導団生徒 .....	13
Sub-Series No.2: 士官学校生徒 .....	13
文書 .....	13
写真 .....	14
Sub-Series No.3: 陸軍大学校生徒 .....	14
文書 .....	14
写真 .....	14
徽章 .....	15
Sub-Series No.4: 参謀本部員 .....	15
Sub-Series No.5: 陸軍大学校教官（第1期） .....	15
Sub-Series No.6: 第2軍参謀 .....	15
文書 .....	15
地図 .....	16
写真 .....	17
Sub-Series No.7: 陸軍大学校教官（第2期） .....	18
Sub-Series No.8: 参謀本部作戦課長 .....	19
文書 .....	19
写真 .....	19
Sub-Series No.9: 陸軍大学校幹事 .....	19
Sub-Series No.10: 騎兵第3旅団長 .....	20
Sub-Series No.11: 騎兵実施学校長 .....	20
Sub-Series No.12: 第5師団長 .....	20
文書 .....	20
写真 .....	22
Sub-Series No.13: 第4師団長 .....	22
Sub-Series No.14: 台湾軍司令官 .....	22
文書 .....	22
写真 .....	22

Sub-Series No.15: 朝鮮軍司令官	22
文書	22
写真	23
Sub-Series No.16: 参謀総長	23
文書	23
写真	23
Sub-Series No.17: 帝国在郷軍人会長	23
文書	23
写真	24
勲章	24
Series No2: 公的活動（その他）	25
Sub-Series No.1: 大日本武徳会長	25
文書	25
写真	25
Sub-Series No.2: 各種公的団体	26
全般	26
新潟県関係	27
Series No3: 個人	28
Sub-Series No.1: 文書	28
Sub-Series No.2: 書簡	29
Sub-Series No.3: 写真	29
軍関係	29
個人・家族	31
Sub-Series No.4: 位記・勲章	33
Sub-Series No.5: 書画	35
Sub-Series No.6: 服飾・物品	37
Series No4: 家族	38
Sub-Series No.1: 鈴木竹子	38
文書	38
書簡	38
書画	42



Sub-Series No.2: 鈴木重雄 .....	44
文書 .....	44
書簡 .....	44
服飾 .....	47



---

## 鈴木荘六文書目録 解題

---

(3.1.1) 資料記号：2003F

(3.1.2) 資料名称：鈴木荘六文書：The Paper's of SUZUKI, Soroku

(3.1.3) 年 代：1883（明治16）年－1943（昭和18）年

(3.1.5) 物的状態：818点（5.00m）

(3.2.4) 来 歴：鈴木荘六文書は鈴木死後、戦時中に内藤久寛（長男重雄の妻比呂子の父）の邸内（新潟県柏崎）に疎開されていた。なお、一部文書は知人が保管。戦後は坂本貞枝氏（重雄長女）の婚家（坂本家：新宿区内藤町）にて保管されていた後、2001年に当館加藤聖文が調査を行い、2003年度に鈴木重徳氏（重雄長男）より寄贈を受けた。

(3.2.2) 履 歴：鈴木荘六は慶応元年（1865）2月に商人鈴木高治の三男として新潟県三条に生まれた。明治14年（1881）4月に新潟県師範学校中等科入学、16年（1883）3月に卒業。18年（1885）12月に教導団入団。20年（1887年）9月に教導団を卒業後、砲兵二等軍曹となる。同年12月に士官候補生・騎兵第1大隊に入隊。21年（1888）11月に陸軍士官学校の第1期生として入学。23年（1890）7月に陸軍士官学校騎兵科を卒業。明治24年（1891）3月に騎兵少尉・騎兵第4大隊付となる。26年（1893）11月に騎兵中尉となり陸軍大学校入学。27年8月に騎兵第4大隊副官、翌28年（1895）4月から12月まで日清戦争に従軍。その間、11月に騎兵大尉・騎兵第4大隊中隊長。31年（1898）12月に陸軍大学校を次席で卒業、騎兵第11聯隊中隊長。32年（1899）12月に参謀本部出仕、33年（1900）3月に参謀本部員。33年7月から12月まで北清事変に従軍。同年12月に陸軍大学校教官。34（1901）年11月に騎兵少佐。37（1904）年3月に第2軍参謀、37年4月から39年1月まで日露戦争に従軍。その間、38年（1905）3月に騎兵中佐、同年9月に第2軍参謀副長。39年（1906）3月に陸軍大学校教官、41年（1908）1月に参謀本部員兼任、翌月に参謀本部員兼軍令部参謀。41年12月から43年12月まで参謀本部作战課長。その間、42年（1909）2月から11月まで欧州出張、同年4月に騎兵大佐。43年（1910）12月に陸軍大学校幹事。大正3年（1914）8月に陸軍少将・騎兵第3旅団長。5年（1916）5月に騎兵実施学校長。7年（1918）7月に陸軍中将。8年（1919）3月に広島第5師団長となり、同年8月から9年（1920）9月までシベリア出兵に従軍。大正10年（1921）6月に大阪第4師団長。12年（1923）8月に台湾軍司令官。13年（1924）8月に陸軍大将・朝鮮軍司令官。15年3月から昭和5年2月まで参謀総長。参謀総長時代の昭和3年（1928）6月に張作霖爆殺事件が起きる。5年（1930）2月に後備役編入。6年（1931）7月

から12年9月まで大日本武徳会会長。また、同年8月から12年（1937）2月まで帝国在郷軍人会会長。在郷軍人会会長時代には在郷軍人会の拡大を図り、天皇機関説問題にも積極的に関与する。また、7年（1932）7月から15年（1940）2月まで枢密顧問官。その間、12年（1937）4月に退役。15年2月東京にて死去。

(3.3.1) 構造と内容:鈴木荘六文書は、鈴木荘六の陸軍時代および在郷軍人会時代が中心である。内容は（一）日記（作戦課長時代・旅団長時代・シベリア出兵時・欧州出張時代）と回顧録（荘六一代記）および陸軍および在郷軍人会時代の関連書類（業務文書・訓示・地図・写真・辞令など）、（二）書簡（妻竹子・息子重雄関係が多い）、（三）その他（掛軸・書画・軍装類など）から構成される。軍人時代の文書が中心であるが、なかでも日露戦争期の文書・地図・写真が多い。なお、文書群には妻竹子および長男重雄（陸軍中佐）関係の文書（書簡など）が混入している。

本目録では、4つのSeries（No.1: 公的活動（軍）・No.2: 公的活動（その他）・No.3: 個人・No.4: 家族）を設定し、その下に必要に応じてSub-Seriesを設定した。まず、本文書群の中核を占めるSeries No.1「公的活動（軍）」については、17のSub-Seriesを設定した。これらは鈴木軍歴に対応するものであり、列記すると以下の通りとなる。教導団入団前の小学校訓導時代および教導団の文書から構成される「No.1: 教導団生徒」、陸軍士官学校時代の文書から構成される「No.2: 士官学校生徒」、陸軍大学校時代および日清戦争従軍中の騎兵第4大隊時代、復員後の騎兵第11聯隊時代の文書から構成される「No.3: 陸軍大学校生徒」、北清事変従軍関係を含む参謀本部員時代の文書から構成される「No.4: 参謀本部員」、陸軍大学校兵学教官時代の文書から構成される「No.5: 陸軍大学校教官（第1期）」、日露戦争に第2軍参謀（後に参謀副長）として従軍した際の文書から構成される「No.6: 第2軍参謀」、再度の陸軍大学校教官時代の文書から構成される「No.7: 陸軍大学校教官（第2期）」、参謀本部参謀および作戦課長時代（欧州出張関係を含む）の文書から構成される「No.8: 参謀本部作戦課長」、陸軍大学校幹事時代の文書から構成される「No.9: 陸軍大学校幹事」、騎兵第3旅団長時代の文書で構成される「No.10: 騎兵第3旅団長」、騎兵実施学校校長時代の文書で構成される「No.11: 騎兵実施学校校長」、広島第5師団長時代（シベリア出兵関係を含む広島第5師団長時代の文書から構成される「No.12: 第5師団長」）、大阪第4師団長時代の文書から構成される「No.13: 第4師団長」、台湾軍司令官時代の文書から構成される「No.14: 台湾軍司令官」、朝鮮軍司令官時代の文書から構成される「No.15: 朝鮮軍司令官」、参謀総長時代の文書で構成される「No.16: 参謀総長」、退役後の帝国在郷軍人会会長時代の文書から構成される「No.17: 帝国在郷軍人会会長」である。

次に、Series No.2「公的活動（その他）」については、大日本武徳会会長時代の文書から構成される「No.1: 大日本武徳会長」と県人会などの各種団体関係の文書から構成される「No.2: 各種公的団体」のSub-Seriesを設定した。

さらに、Series No.3「個人」に関しては、「No.1: 文書」・「No.2: 書簡」・「No.3: 写真」・「No.4: 位記・勲章」・「No.5: 書画」・「No.6: 服飾・物品」の6つのSub-Seriesを設定した。

最後に、Series「No.4: 家族」については、妻竹子の個人文書から構成される「No.1: 鈴木竹子」と長男重雄の個人文書から構成される「No.2: 鈴木重雄」の2つのSub-Seriesを設定した。以下、4つのSeriesおよびSub-Seriesについて解説を加える。

Series No.1 「公的活動（軍）」は、鈴木莊六の生涯にわたる活動の大半を占め、本文書群の中核であるが、多くは任命などに関わる辞令書・官記類である。鈴木莊六文書は、業務関係の文書が少なく、ある特定の Series にしか業務文書が残存していないという特徴を持っている。業務文書が存在せずほぼ辞令類（この他数点の写真など）で占められている Sub-Series は、「No.1: 教導団生徒」・「No.2: 士官学校生徒」・「No.3: 陸軍大学校生徒」・「No.4: 参謀本部長」・「No.5: 陸軍大学校教官（第1期）」・「No.7: 陸軍大学校教官（第2期）」・「No.9: 陸軍大学校幹事」・「No.11: 騎兵実施学校長」・「No.15: 朝鮮軍司令官」の9つである。これら以外の Sub-Series では、業務文書が含まれているが、「No.14: 台湾軍司令官」の業務文書は1点のみである。また、写真や徽章類がある場合は、Sub-Series の下に Sub-Sub-Series として「写真」・「徽章」などを設定したが、便宜的なものであって、資料群構造を反映させたものではない。

Sub-Series のなかでもっとも多く業務文書を含む 「No.6: 第2軍参謀」は、死傷表などの統計資料の他、戦闘関係の地図と戦地写真から構成される。これらは第2軍作戦主任参謀としての業務に基づいて鈴木個人の手許に蓄積されたものであり、また、のちに陸軍大学校において行われた日露戦争の講義に活用されたものと思われる。なお、この Series の下に、3つの Sub-Sub-Series（「文書」・「地図」・「写真」）を設定した。これらは形態別となっているが、上述したように便宜的なものであって、Sub-Series 内部の構造を反映させたものではない。鈴木莊六文書は、受入時点において原秩序が失われていたことと、調査時点でそれぞれ形態別に区分されていたため、これらの事情を考慮した結果、このような編成を行った。なお、Sub-Series 「No.6: 第2軍参謀」に含まれる資料の内、地図「日露戦役記念地図（奥第2軍鈴木莊六作戦主任参謀使用）」（No.347-2）は戦後の一時期、長男重雄氏から反町栄一氏の手許に移されていたものである。この地図以外にも反町氏所蔵となっていたものが数点あるが、その理由は明らかではない。また、地図「〔日露戦争関係地図一括〕」（No.254-6）は「鈴木総長」との書き込みがあり、鈴木が参謀総長時代に使用していた形跡がうかがえる。参謀総長時代にこの地図を入手したものが第2軍参謀時代からすでに手許にあったものであるか明らかではないが、日露戦争当時の第2軍の行動に関わるものであるため、第2軍参謀時代の Sub-Series に編入した。

この他の Sub-Series では、「No.8: 参謀本部作戦課長」・「No.10: 騎兵第3旅団長」・「No.12: 第5師団長」には日記が含まれている。鈴木の前記には、部分的に日記参照との記述があり、その記述箇所と現存する日記がカバーする時期が一致することから、鈴木は毎年継続的に日記を書いていたのではなく、ある役職に就任または活動を行った際、特別に日記を書いていたと推測される。また、これら3つの Sub-Series は辞令類と日記、および写真から構成されているが、「No.12: 第5師団長」は勲記等の証書と訓示類が含まれる。このうち「第5師団長第四師団長時代之訓示類」（No.256）は訓示を一括したものであり、後の第4師団長時代のものも含まれるが、第5師団関係が半数以上を占めるため、こちらの Sub-Series に含めた。

上記以外の Sub-Series である 「No.13: 第4師団長」・「No.16: 参謀総長」・「No.17: 帝国在郷軍人会長」についてであるが、まず 「No.13: 第4師団長」は量的に少ないが、前述したように 「No.12: 第5師団長」の中に第4師団長関係の訓示が含まれている。その一方、「随時検閲の口演事項 [5D]・教育者の覚悟に就て [4D 初度巡視時ノ口演]・愛 [人格尊重・個性尊重・自学主義・発達観・内在主義]」（No.207-1）は第5師団長時代のものと思われる文書が1点混在している。こちらは他の2点の文書に関連するものであると推測されるため、「No.13: 第4師団長」に含めた。また、「No.16: 参謀総長」も文書量は少ないが、「支那人離別の書翰」

(No.254-1) は前述した地図と同様、戦後の一時期、反町氏の手許に保管されていたものである。この他、「No.17: 帝国在郷軍人会長」は比較的文書量が多く、3つのSub-Sub-Series（「文書」・「写真」・「勲章」）を設定したが、これらも便宜的なものである。なお、このうち写真「満洲ニ於ケル写真 昭和七年奉天大会」（No.243）は袋で一括されていたものであるが、「写真〔感興にて〕」（No.243-4）は他の写真と時期が異なり混入したものと推測される。

Series No.2「公的活動（その他）」は、軍務以外の公的活動に関わって作成・蓄積された資料群であるが、辞令書・推薦状・感謝状などが多い。そのなかでも多数を占める大日本武徳会は単独でSub-Series「No.1: 大日本武徳会長」とし、その他は「No.2: 各種公的団体」として一括した。

Series No.3「個人」は、鈴木木の私的活動のなかで作成・蓄積された資料群であり、Sub-Seriesとして「No.1: 文書」・「No.2: 書簡」・「No.3: 写真」・「No.4: 位記・勲章」・「No.5: 書画」・「No.6: 服飾・物品」の6つを設定した。まず、Sub-Series「No.1: 文書」は鈴木自らが執筆した「自叙 莊六一代記」（No.11）と「言志録」（No.254-2, No.254-3）が含まれる。特に「自叙 莊六一代記」は木箱に収められ、他の資料から別置されて保管されていたものである。また、活字化されたもの（No.1）もある。なお、鈴木木の没後、『陸軍大将鈴木莊六伝』（No.352）が刊行されているが、戦時中であったため伏せ字が多く、自叙伝と読み比べると内容が改竄されている箇所があり注意が必要である。本来は、自叙伝を活字化して刊行する計画であったが、時局柄、より編集を加えた伝記に切り替わったのではないかと推測される。いずれにせよ、公刊されている伝記と自叙伝は相互に検討しつつ活用する必要があるだろう。

つぎにSub-Series「No.2: 書簡」は少数であり、鈴木宛の書簡が少ないのに比例して後述するように鈴木莊六が妻竹子らに宛てた書簡が多いことが本資料群の特徴である。

また、Sub-Series「No.3: 写真」についてであるが、鈴木莊六文書の特徴の一つである写真の多さを反映して多岐にわたっている。ただ、大きく分けると軍務関係と家族関係に分けられ、2つのSub-Sub-Series（「軍関係」・「個人・家族」）を設定した。なお、軍務のなかで作成されたことが明瞭なものは、Series「I. 公的活動（軍）」のなかのいずれかのSub-Seriesに含めたが、軍務関係であることは明らかでも撮影時期や背景が不明確なもの、または時期が多岐にわたっているか、家族写真などが混在しているものなどはSub-Sub-Series「軍関係」に含めた。また、「個人・家族」の写真には妻竹子および長男重雄に関係するものも含まれる。

さらに、Sub-Series「No.4: 位記・勲章」は明らかに軍務・公的活動に含まれるものを除いたものを対象としている。また、勲章などのモノ資料もここに含まれる。なお、勲章類を除いたモノ資料については、Sub-Series「No.6: 服飾・物品」とした。

この他、Sub-Series「No.5: 書画」は漢詩・水墨画・油絵など鈴木自らが作成したものと鈴木宛に送られたものから構成される。後述する鈴木竹子所蔵のものと合わせて書画が大量に残されているが、混在していたまま保管されていたため、鈴木莊六および妻竹子が作成したもの以外の書画は本来、莊六所蔵か竹子所蔵か明らかではない。ここでは竹子作成のもの以外は全てSub-Series「No.5: 書画」に含めた。

Series No.4「家族」は、妻竹子および長男重雄が所持していたと思われるものであり、混入文書といえるものである。ただし、荘六が所持していたものと竹子および重雄が所持していたものとの明確な区分けは困難であり、特に書簡・写真・書画などは鈴木荘六文書のなかに一体化しているため、竹子・重雄関係の資料は、別の Fonds、または Sub-Fonds とはせず、Sub-Series 「No.1: 鈴木竹子」・「No.2: 鈴木重雄」として立てた。

Sub-Series 「No.1: 鈴木竹子」は、3つの Sub-Sub-Series (「文書」・「書簡」・「書画」) から構成されるが、「文書」は主に竹子が結婚前の教師時代の辞令類が中心である。また、「書簡」は荘六からのものが大半である。なお、書簡の配列は荘六を1番目、家族・親類関係を2番目、第3者を3番目とし、それぞれ五十音順とした。この他、「書画」は前述したように、荘六か竹子か所持者が不明なものが多いため竹子作成（またはそれと思われる）のものに限定してある。

Sub-Series 「No.2: 鈴木重雄」は、3つの Sub-Sub-Series (「文書」・「書簡」・「服飾」) から構成されるが、このなかには妻比呂子のもも含まれる。特に「書簡」は大半が身内からのものであるが、比呂子宛のものも多く含まれている。これらは内容的に重雄に関係するものもあるので、独立した Series とはせず、この Series に含めた。

(3.4.5) **形態と状態**: 文書類以外に写真・軸物・絵画（油絵）・軍装品・勲章・表札といったモノ資料が含まれる。文書の保存状態はそれほど悪くはないが、戦後、何度か移転を行っているあいだに原秩序はほとんど失われた。寄贈段階では、プラスチック製衣装ケースに保管され、辞令類や書簡などはある程度まとめられた状態であった。また、調査当初は、自叙伝の活字版のみ存在し、その原本である「荘六一代記」は未発見であったが、その後、他の文書群と異なり、専用の木箱に収められて別の場所に保管されていたことが判明した。また、文書の一部（日露戦争関係の地図・張学良ら中国側要人からの手紙・言志録など）は戦後の一時期、知人の反町栄一氏に預けられていた。

(3.4.6) **検索手段**: 『史料目録 第95集』

(3.5.4) **関連資料の所在**: 当館所蔵「赤井春海文書」は、鈴木が朝鮮軍司令官時代の参謀長であった赤井春海の個人文書であり、赤井宛の鈴木書簡が含まれる。この他、鈴木のご郷である新潟県三条市の三条市歴史民俗産業資料館には、鈴木の手書・写真類が若干所蔵されている。





表題・作成等	年代	形態・数量	整理番号
--------	----	-------	------

## Series No1: 公的活動(軍)

## Sub-Series No.1: 教導団生徒

〔高等小学校教員免許状〕新潟県→鈴木莊六	明治17年3月8日(1884)	1枚・墨書	163
辞令〔任新潟県三条校3等訓導〕新潟県大書記官木梨精一郎→鈴木莊六	明治17年7月26日(1884)	1枚・墨書	162
〔三条小学校3等訓導服務免除願・明治18年12月5日付新潟県令篠崎五郎聞届書〕鈴木莊六→新潟県令篠崎五郎	明治18年11月16日(1885)	1綴・墨書	161
辞令書〔陸軍教導団砲兵科生徒申付〕陸軍教導団→鈴木莊六	明治18年12月2日(1885)	1枚・墨書	160
辞令書〔陸軍教導団砲兵大隊1等生徒申付〕陸軍教導団砲兵大隊→鈴木莊六	明治20年3月5日(1889)	1枚・墨書	159
賞状〔7珊知米野砲競点射撃第2優等之証〕陸軍教導団大隊長陸軍砲兵少佐柴野義広→鈴木莊六	明治20年5月26日(1889)	1枚・墨書	158
辞令書〔砲兵科卒業証書〕陸軍教導団陸軍歩兵大佐阿武素行・陸軍教導団砲兵大隊長陸軍砲兵少佐柴野義広→鈴木莊六	明治20年9月16日(1889)	1枚・墨書	157
辞令書〔仙台鎮台附申付〕陸軍省→鈴木莊六	明治20年9月16日(1889)	1枚・墨書	155
官記〔任陸軍砲兵2等軍曹〕陸軍教導団→鈴木莊六	明治20年9月16日(1889)	1枚・墨書	156
辞令書〔砲兵第2聯隊附申付〕仙台鎮台→鈴木莊六	明治20年10月19日(1889)	1枚・墨書	154
辞令書〔第2大隊第1中隊附申付〕砲兵第2聯隊→鈴木莊六	明治20年10月20日(1889)	1枚・墨書	153
辞令書〔士官候補生を命じ騎兵第1大隊入隊申付〕監軍部→鈴木莊六	明治20年11月15日(1889)	1枚・墨書	152
辞令書〔免陸軍砲兵2等軍曹〕仙台鎮台→鈴木莊六	明治20年11月17日(1889)	1枚・墨書	151
官記〔任陸軍騎兵2等軍曹〕騎兵第一大隊→鈴木莊六	明治21年9月3日(1888)	1枚・墨書	150

## Sub-Series No.2: 士官学校生徒

## 文書

辞令書〔士官学校入学申付〕将校学校監→鈴木莊六	明治21年10月13日(1888)	1枚・墨書	149
官記〔任陸軍騎兵1等軍曹〕監軍部→鈴木莊六	明治21年12月18日(1888)	1枚・墨書	148
官記〔任陸軍騎兵少尉〕陸軍大臣大山巖→鈴木莊六	明治24年3月26日(1891)	1枚・墨書	147
辞令書〔補騎兵第4大隊第1中隊附〕陸軍省→鈴木莊六	明治24年3月26日(1891)	1枚・墨書	146
辞令書〔士官学校生徒隊中隊附心得被仰付〕陸軍省→鈴木莊六	明治26年2月18日(1893)	1枚・墨書	144
認可状〔明治24年11月25日より明治25年3月31日における物品出納に関して〕会計検査院長渡辺昇→鈴木莊六	明治26年9月29日(1893)	1枚・墨書	143

## 写真

騎兵第一大隊士官候補生時代写真		4部	217
-----------------	--	----	-----

## Sub-Series No.3: 陸軍大学校生徒

## 文書

辞令書〔補士官学校生徒隊中隊附〕 陸軍省→鈴木莊六	明治26年11月1日(1893)	1枚・墨書	141
官記〔任陸軍騎兵中尉〕 内閣総理大臣伊藤博文→鈴木莊六	明治26年11月1日(1893)	1枚・墨書	142
辞令書〔補騎兵第4大隊〕 陸軍省→鈴木莊六	明治26年12月15日(1893)	1枚・墨書	140
辞令書〔修学の為め歩兵第3聯隊附を命ず〕 参謀本部→鈴木莊六	明治27年6月8日(1894)	1枚・墨書	138
辞令書〔補騎兵第4大隊副官〕 陸軍省→鈴木莊六	明治27年8月18日(1894)	1枚・墨書	137
辞令書〔賜1等給〕 陸軍省→鈴木莊六	明治27年12月8日(1894)	1枚・墨書	136
辞令書〔補騎兵第4大隊中隊長〕 軍事内局→鈴木莊六	明治28年11月22日(1895)	1枚・墨書	134
官記〔任陸軍騎兵大尉〕 内閣総理大臣伊藤博文→鈴木莊六	明治28年11月22日(1895)	1枚・墨書	135
辞令書〔補騎兵第4大隊附〕 陸軍省→鈴木莊六	明治29年2月18日(1896)	1枚・墨書	133
勲記〔明治二十七八年戦役の功に依る勲六等・単光旭日章他〕 賞勲局総裁大給恒→鈴木莊六	明治29年3月30日(1896)	1枚・墨書	132
辞令書〔修学の為め歩兵第1聯隊附を命ず〕 参謀本部→鈴木莊六	明治29年6月3日(1896)	1枚・墨書	130
辞令書〔補軍馬補充部本部部員〕 陸軍省→鈴木莊六	明治30年10月25日(1897)	1枚・墨書	128
辞令書〔修学の為め近衛野戦砲兵聯隊附を命ず〕 参謀本部→鈴木莊六	明治30年6月11日(1897)	1枚・墨書	129
辞令書〔賜1等給〕 陸軍省→鈴木莊六	明治30年11月5日(1897)	1枚・墨書	127
辞令書〔明治31年度総軍動員計画に伴い留守第1師団参謀に配属する旨の内達(補達第58号)〕 軍馬補充部本部長大蔵平三→鈴木莊六	明治31年3月28日(1898)	1綴・墨書	126
辞令書〔補騎兵第5聯隊附〕 陸軍省→鈴木莊六	明治31年4月18日(1898)	1枚・墨書	125
辞令書〔修学の為め工兵第1大隊附を命ず〕 参謀本部→鈴木莊六	明治31年6月11日(1898)	1枚・墨書	124
辞令書〔補騎兵第11聯隊中隊長〕 陸軍省→鈴木莊六	明治31年10月10日(1898)	1枚・墨書	123

## 写真

写真〔鈴木莊六他集合写真〕	日清戦争従軍時カ	1枚	304
写真〔鈴木莊六他集合写真〕	日清戦争従軍時カ	1枚	305

## 徽章

陸軍大学校卒業徽章		1個・箱	350-4
-----------	--	------	-------

## Sub-Series No.4: 参謀本部員

辞令書〔参謀本部出仕兼騎兵実施学校教官被仰付〕 陸軍省→鈴木荘六	明治32年12月6日(1899)	1枚・墨書	122
辞令書〔補参謀本部員〕 陸軍省→鈴木荘六	明治33年3月12日(1900)	1枚・墨書	121
辞令書〔太活運輸通信支部員被仰付〕 陸軍省→鈴木荘六	明治33年7月23日(1900)	1枚・墨書	120
辞令書〔太活運輸通信支部員被免〕 陸軍省→鈴木荘六	明治33年11月9日(1900)	1枚・墨書	119
勲記〔明治33年清国事変に於ける戦功に依る勲五等 雙光旭日章他〕 賞勲局總裁大給恒→鈴木荘六	明治34年10月26日(1901)	1枚・墨書	114

## Sub-Series No.5: 陸軍大学校教官(第1期)

辞令書〔補陸軍大学校兵学教官〕 陸軍省→鈴木荘六	明治33年12月25日(1900)	1枚・墨書	118
辞令書〔参謀本部御用掛兼勤を命ず〕 陸軍省→鈴木荘六	明治33年12月25日(1900)	1枚・墨書	117
辞令書〔明治34年陸軍大学校学生候補者試験委員を命ず〕 参謀本部→鈴木荘六	明治34年4月2日(1901)	1枚・墨書	116
官記〔任陸軍騎兵少佐〕 内閣總理大臣桂太郎→鈴木荘六	明治34年11月3日(1901)	1枚・墨書	113
辞令書〔免参謀本部御用掛兼勤〕 陸軍省→鈴木荘六	明治34年12月27日(1901)	1枚・墨書	111
辞令書〔明治35年陸軍大学校学生候補者試験委員を命ず〕 参謀本部→鈴木荘六	明治34年12月24日(1901)	1枚・墨書	112
辞令書〔明治37年陸軍大学校学生候補者試験委員を命ず〕 参謀本部→鈴木荘六	明治36年12月16日(1903)	1枚・墨書	110
大日本帝国外国勲章佩用免許証〔プロシア皇帝より鈴木荘六に贈与した王冠第三等勲章を受領佩用を允許〕 賞勲局總裁大給恒・賞勲局書記官横田香苗・賞勲局書記官藤井善言→鈴木荘六	明治37年3月5日(1904)	1枚・墨書	78

## Sub-Series No.6: 第2軍参謀

## 文書

官記〔任陸軍騎兵中佐〕 内閣總理大臣桂太郎→鈴木荘六	明治38年3月1日(1905)	1枚・墨書	109
辞令書〔第2軍参謀副長被仰付〕 陸軍省→鈴木荘六	明治38年9月27日(1905)	1枚・墨書	107
明治三十七八年戦役第二軍死傷表 第二軍司令部罫紙	明治38年12月20日調(1905)	1枚・墨書	103
明治三十七八年戦役第二軍死傷将官連名簿〔陸軍中將小川又次・陸軍少將秋山好古・陸軍少將小泉正保・陸軍少將渡辺勝重の負傷地について〕 第二軍司令部罫紙		1枚・墨書	104

鈴木莊六文書目録 / 公的活動(軍) / 第2軍参謀

明治三十七八年戦役第二軍工兵部事業ノ梗概〔第2軍上陸兵の設備・南山の陥落・遼陽戦・沙河会戦・奉天会戦等〕 第二軍工兵部長陸軍少将中村愛三	明治38年12月(1905)	1綴・謄写版	105
祭文〔第2軍司令官陸軍大将奥保鞏による日露戦争中における陸軍歩兵大佐関谷銘次郎以下戦死病没者諸士の霊を祭る文〕 第二軍司令官陸軍大将奥保鞏	明治38年9月24日(1905)	1枚・活版	184
詔勅〔日露戦争宣戦布告〕 東京国光社	明治39年1月13日(1906)	1冊・活版	265
日本帝国明治三十七八年従軍記章之証 賞勲局総裁大給恒・賞勲局書記官横田香苗・賞勲局書記官藤井善言→鈴木莊六	明治39年4月1日(1906)	1枚・墨書	75
勲記〔明治三十七八年戦役の功に依る功3級金鷄勲章・勲三等旭日中綬章〕 賞勲局総裁大給恒→鈴木莊六	明治39年4月1日(1906)	1枚・墨書	101
戦史叢書第十二号 日露戦争に於ける第二軍北進運動開始の事情と得利寺の戦闘 財団法人偕行社	昭和6年7月30日(1931)	1冊・付図・活版	271

地図

日露戦役記念地図(奥第二軍鈴木莊六作戰主任参謀使用)		1枚・墨書	347-2
地図〔鉄嶺-奉天-長春周辺〕 満洲軍総司令部・第二軍参謀部	明治38年4月8日、16日、19日、6月20日(1905)	1枚・活版	347-2-1
地図〔甘泉堡・海城周辺〕 陸軍測量部カ		1枚・活版	347-2-2
地図〔熊岳城周辺〕 陸軍測量部	明治29年製版(1896)	1枚・活版	347-2-3
地図〔奉天東北部第2補足図〕 陸軍測量部	明治37年10月製版、明治37年11月17日(1904)	1枚・活版	347-2-4
地図〔遼陽-奉天間補足図〕		1枚・活版	347-2-5
地図〔黒溝台・尚在門付近補足図〕 第八師団参謀部		1枚・活版	347-2-6
地図〔第8師団陣地占領略図〕		1枚・活版	347-2-7
地図〔瓦房店周辺〕 陸軍測量部カ	明治29年製版(1896)	1枚・活版	347-2-8
地図〔遼揚周辺〕 陸軍測量部カ		1枚・活版	347-2-9
地図〔牛莊-海城周辺〕 陸軍測量部	明治37年製版(1904)	1枚・活版	347-2-10
〔日露戦争関係地図一括〕		13種	254-6
奉天付近 露版八万四千分ノ一 参之一 第一軍参謀部	明治37年11月製(1904)	1枚・活版	254-6-1
第四師団配備及敵之位置略図	明治38年2月3日調(1905)	1枚・蒟蒻版	254-6-2
第二軍各団隊輸出入一覽表 第二軍参謀部	明治38年10月調(1905)	1枚・活版	254-6-3
〔奉天付近日露両軍位置〕 満洲軍総司令部	明治38年2月5日調(1905)	1枚・活版	254-6-4
〔明治38年3月奉天会戦当時における日露両軍位置〕	明治38年3月頃(1905)	1枚・蒟蒻版	254-6-5
地図〔遼陽第14号〕	明治37年9月以前(1904)	1枚・活版	254-6-6
軍事機密 復州第1号永甯城〔日露両軍位置〕	明治37年(1904)	1枚・活版	254-6-7